

## 第7章 舌内入声音の表記と音価

### 1. はじめに

本章では、『捷解新語』のハングル表記にあらわれる舌内入声音の表記と音価について、キリシタン資料のローマ字表記と比較してその規範性の考察を行う。中古漢語における入声音の開音節化について、これまでの研究ではキリシタン資料のローマ字による表記、日本語の音義・訓点資料などの仮名表記、朝鮮資料のハングルによる表記などに重点が置かれてきた。ところが、ローマ字による表記およびハングルによる表記については、未だに論じ足りない点があると思われる。また、両資料に用いられる入声音のうち、舌内入声音の表記において均質的ではないことが指摘できるが、未だにそれに対する十分な論議がなされていない。

そこで、本章ではキリシタン資料のローマ字表記と『捷解新語』原刊本(以下、『捷解新語』または「原刊本」とする)のハングル「卒」(ccu)として反映された舌内入声音の表記を中心に調べ<sup>\*)</sup>、舌内入声音の表記に見られる朝鮮資料の規範意識の実態を明らかにする。なお、両資料に用いられている表記における共通点、相違点などを考察することによって、日本語史研究資料としての外国資料の位置を改めて論じることとする。

### 2. 先行研究と問題提起

中古漢語の入声音が日本語の中で漢字音として安定していく過程は複雑である。特に、キリシタン資料のローマ字表記における形(-t)から舌内入声音は室町末期まで開音節化していないと言われてきた。ここでは、まず、仮名資料およびキリシタン資料、朝鮮資料などにおける従来の研究がどのようになされてきたかを検討してみる。

橋本進吉(1928)により入声音の問題が取りあげられ、キリシタン資料のローマ字表記における舌内入声音は表記が表わすように室町末期まで-tを保っていたことが指摘される。

入聲のツを t と書いて、普通のツ(tqu)と區別したのは、發音に相違があつたので、やはり文字通り t と發音したのであらう。此の音は、語尾のみならず、語中にもあつた事は、右に挙げた xetgai(殺害) fitgiö(必定)以下の例によつて明である。今、音聲の歴史の上から考へて見るに、入聲のツは、支那に於ては t 音であつたのである。日本では、之を「ち」「つ」の文字で寫したけれども、實際に於ては、何時も之をチツと發音したかは疑問であつて、少くとも或場合には t と發音したものと想はれる。(p. 262)

橋本進吉以来、舌内入声音は日本語の發音においても室町末期まで閉音節-t であるとしてきたが、その後、音義、訓点資料などによる研究が進んだことによって、キリシタン資料以前から舌内入声音の開音節化が進んできたのではないかという疑問が出されるようになる。音義や訓点資料等における舌内入声音の仮名表記については、小松英雄(1959, 1971)、林史典(1974, 1980, 1982)、沼本克明(1982)等の研究に注目する必要がある。

一方、キリシタン資料のローマ字表記においては舌内入声音が-t として用いられているのに対して、キリシタン資料とほぼ同じ時期の言語を反映したと思われる朝鮮資料におけるハングル表記においては舌内入声音が入声音形「-ㄷ」(t)、または母音をともなう開音節化形「ㄷ」(ccu)などとして用いられることが指摘される。

浜田敦(1955)は、仮名で一般に「つ」と表記された漢音系の舌内入声韻尾を、キリシタン資料のローマ字表記においては原則として t のローマ字綴りで表記していることを取りあげ、『捷解新語』のような文献から見て舌内入声音「ㄷ」(ccu)はすでに現代語と同じ [tqu] か、それに近い音になっていたとする。同様に、亀井孝(1984)においても、『捷解新語』のハングル表記に反映されている舌内入声音の形「-ㄷ」(t)と「ㄷ」(ccu)の表記について、「-ㄷ」(t)は舌内入声韻尾-t であるとし、「ㄷ」

(ccu)は現代語の「つ」と同じく開音節化している音であると推定している\*<sup>2</sup>。

以上に述べた先行研究を踏まえ、以下の節では、キリシタン資料における舌内入声音-tの規範性などを検討するとともに、朝鮮資料における舌内入声音のハングル表記「-ㄷ」(t)、「ㅈ」(ccu)などについて考察を行うことにする。

### 3. キリシタン資料のローマ字表記

キリシタン資料における『日葡辞書』とアビラ・ヒロン『日本王国記』見られる舌内入声音のローマ字表記について調査・考察を行う。

#### 3.1. 『日葡辞書』の舌内入声音の表記

キリシタン資料のローマ字表記については、早くから版本、写本それぞれの研究がなされている。そのうち、『日葡辞書』における入声音表記の場合、唇内・喉内入声音は早くから開音節化しているが、舌内入声音は多くの例が-tのまま入声音形を保ちつつ室町末期に及んでいると言われている\*<sup>3</sup>。

Butbat(仏罰)	Fitjet(筆舌)	Iitguet(日月)
Qetyeqi(血液)	Retza(列座)	Xutbot(出沒)

ただ、舌内入声音は中古漢語の入声音形-tだけではなく、Connichi(今日)、Qichinichi(吉日)、Bechi(別)などの例と、稀には Matçudai(末代)、Butçuji(仏事)のように開音節化形 chi, tçu の例も見られる。舌内入声音の表記方法は、キリシタン資料の中で最も口頭語をよく反映していると見られる『天草版伊曾保物語』でも、Bachi(罰)、Bechi(別)、Mitçu(蜜)などの一字漢語や一般に日常頻用される語を除いては、ほとんどの例が入声音形-tの形を保っていることで一致している\*<sup>4</sup>。このように、キリシタン資料における舌内入声音は-t表記を規範としていながら、一方、『日葡辞書』では同一語に対して入声音形と開音節化形を並記して掲げる場合がある。

以下では、『日葡辞書』における標出語及び説明文の中から舌内入声音が入声音形と開音節化形ともにあらわれる語について、語中の場合と語末の場合とにわけて調べてみることにする。同一語に入声音形と開音節化形の両表記があらわれる場合、「同じ、または」あるいは「まさる」という説明がなされている\*<sup>5</sup>。

### 1. 語中の場合

同じ、または : t̥u = t (1例) Mat̥udai. 1, Matdai. (末代)

(以下、ローマ字は省略する)

: chi = t (13例) 越度, 結縁, 別, 別儀, 別事, 別人, 別々, 逸物,  
吉事, 吉日, 七難, 失念, 日月

まさる : chi > t (3例) 八軸, 節分, 別時

: t > chi (3例) 血脈, 結願, 別段

: t > t̥u (1例) 仏事

### 2. 語末の場合

同じ、または : chi = t (14例) 正月, 先達, 三月, 五月, 罰, 仏罰, 旱魃, 別,  
別々, 大吉, 万吉, 今日, 明日, 一日

: t̥u = t (なし)

まさる : t > chi (2例) 天罰, 当罰

: chi > t (なし)

: t̥u > t (なし)

以上から、舌内入声音に「同じ、または」のように、入声音形と開音節化形が対等に用いられている例が、語中の場合は21例のうち14例、語末の場合は16例のうち14例で、多くの例が入声音形と開音節化形の両様に用いられていることが分かる。また、開音節化形の中では t̥u は2例しかなく(その中の1例は入声音形がまさるとされている)に対して、chiの方が一般的に用いられ、日常頻用語や宗教用語のような異音に開音節化形が多く見られることが指摘できる。森田武(1980)では、But̥uji

よりも Butji の方がまさるという例をあげ「規範的には入声形を正しいとしながらも、話し言葉では開音節化の傾向が次第に進んでいたものらしい」と、舌内入声音の日本語化が進んでいたことを指摘している。

さらに、入声音形と開音節化形のうち、どちらの方がまさるかについての注記の中で、語中の場合は入声音形より開音節化形の方がまさるという「八軸, 節分, 別時」の例が見られるのに対して、語末の場合は入声音形がまさるという注記の例だけが見られる。

ただ、ここで注意したいのは、入声音形と開音節化形のうち、「同じ、または」あるいはどちらの方が「まさる」かなどのように注記する必要があったということは、舌内入声音がすでに開音節化の段階にあったことを示すものであるということである。即ち、『日葡辞書』における舌内入声音-t は環境や場面によって日常頻用語や宗教用語を中心に徐々に開音節化が進み、chi, tçu のように全て開音節化してしまう直前の姿であったことが推測できる。

また、舌内入声音の開音節化が進んでいたことについては、『日葡辞書』に見られる和語のチ・ツとともに、舌内入声音の開音節化形 chi, tçu の表記が破擦音化を反映していることから示される\*6。林史典(1974, 1980, 1982)の一連の研究では、日本字音における入声韻尾は「入声韻尾の体系と先行母音との二重調和」にささえられているとして、舌内入声音チ・ツについて寄生母音を付着させた-t'、-t'' という符号で表わす。これは、仮名表記チ・ツは、キリシタン資料のローマ字表記が表わす-t のような閉音節でもなく、現代語の「ち」[tʃi]、「つ」[tçu]のように完全な開音節化の形でもない開音節化の過程にあることを示すものである。また、『日葡辞書』にあらわれる舌内入声音 -t, -tçu, -chi 3種の表記を「-t: -tçu, -chi」のように二類に分け、-tçu のかたちの存在する意味は決して小さくないとし、「キリシタン文献のローマ字表記は、舌内入声音が国語音に同化しようとする、その直前の状況をしめしている」と述べている。

以上のように、舌内入声音の開音節化が進んでいたことが指摘されているが、実際の音色がどのようなものであるかは興味深いところである。以下では、キリシタン資料における舌内入声音の開音節化を明確にするために、キリシタン資料の版本と

写本のちがいを取りあげ、舌内入声音の規範性やアビラ・ヒロン『日本王国記』の表記などについて検討・考察を行うことにする。

### 3.2. アビラ・ヒロン『日本王国記』の表記

アビラ・ヒロンの『日本王国記』(1615?)は、16世紀の末から17世紀にかけて約20年間主として長崎にいた、スペイン生まれの一商人の残した記録である\*<sup>7</sup>。本節では、「アビラ・ヒロン 日本王国記」に用いられているローマ字表記を中心に考察を行う\*<sup>8</sup>。

土井忠生(1965)では、アビラ・ヒロン 日本王国記においてカ行のキと、タ行のタ、テ、トなどにh表記が用いられていることを指摘している\*<sup>9</sup>。

\*キ qui・chi：キのchiはMichi(三木、二四七ページ以下)、Sachinotzu(崎の津、二〇二ページ)の特例に限る。・・・(中略)・・・hはエスパニャ語で発音に関係なく添加され、また省略される文字だからである。(p.652)

\*タ ta・tha、テ te・the、ト to・tho：タ・テ・トの綴字のtha, the, thoは、Thayco, Thera, Thonoなど使われているが、Tayco, Tera, Tonoと同じであって、これらのh字は発音とは無関係である。(p.654)

上記のように、アビラ・ヒロン『日本王国記』に見られるhについて、発音とは無関係であるとしながら、タ・テ・トのhについては、「エスパニャ語では語頭、語中において自由に添加省略されているが、日本語の綴字で特にタ・テ・トの音節に添加された理由ははっきりとはわからない」とし、「hの字は表記上何らかの価値を加えるものがあるかも知れない」としている。また、上にあげている例の他にもThenca(天下)、Facatha(博多)などの例のように、タ・テ・トの多くの例にhが添加された形としてあらわれている。その他、タ行のチ・ツの表記を調べてみると、チにはchi・tziが、ツにはtzu・tz・zu・zqu・z・quのように多くの表記が用いられて、舌内入声音の開音節化が進んでいたと解釈することも可能であろう。

## 3.2.1. 舌内入声音の表記 t・tz・tzu

アビラ・ヒロン『日本王国記』の舌内入声音の表記を見てみると、-t だけではなくむしろ tz・tzu の表記が多く見られる点で、他の版本や写本で規範的に -t として統一されていることと対照的であることが指摘できる。土井忠生(1982)では、舌内入声音の表記として t・tz・tzu をあげ、「漢字の入声音は Conguat(今月、九三ページ)、Daybut(大仏、一一九、二三一ページ)と書いたのは少なく、Gonguatz(五月、九〇ページ)、Saymatzu(歳末、九一ページ)のように、ツの音節と区別を失った書き方が見られる」としている\*<sup>10</sup>。『日本王国記』に出現する舌内入声音の表記を『日葡辞書』の例と比較してみると、以下のようである。

	『日本王国記』	『日葡辞書』
「-t」の例	Guat(月グワツ)p93	なし
	Conguat(今月コングワツ)p93	Conguat.
	Daybut(大仏)p119, p231	Daibut.
「-tz」の例	Jonguatz(正月)p84, p91, p393	Xõguat.
	Xonguatz(正月)p91, p92(3 例), p94, p116	
	Xoguatz(正月)p94	
	Niguatz(二月)p94	Niguat.
	Sanguatz(三月)p91, p94	Sanguachi.l, Sanguat.
	Xiguatz(四月)p94	Xiguat.
	Gonguatz(五月)p54, p90	Goguat.l, goguachi.
	Goguatz(五月)p94	
	Rocuguatz(六月)p94	なし
	Xichiguatz(七月)p95	Xichiguachi. / Xichiguat.
	Xichinguatz(七月)p346, p359	
	Fachiguatz(八月)p95	Fachiguachi.
	Cuguatz(九月)p95	なし

Xuguatz(十月)p95

Iũguachi./ Iũguat.

Xiguatz(十二月)p95

なし

(注；Xuniguatz の誤りか(土井))

「-tzu」の例 Saymatzu(歳末)p91

Saimat.

『日本王国記』舌内入声音の表記を『日葡辞書』の例と比較してみると、『日葡辞書』ではほとんど-tであるのに対して、『日本王国記』では-tだけではなく-tzの表記が用いられていることが注目される。このように、他の版本、写本とは異なる表記が用いられることは、『日本王国記』の成立とも関係があるように思う。即ち、アビラ・ヒロン『日本王国記』は宣教師ではない普通の人日本語のなまの発音を記録したもので、舌内入声音に t・tz・tzu 表記が用いられているのは、その他の多くのキリシタン版の舌内入声音に-tが用いられていることとは異なっている。

一方、『捷解新語』における舌内入声音が入声音形-tよりも主に「卒」(ccu)として表記されているように、『日本王国記』においても多くの例が-tzとして用いられている点は相通じるところであるが、『捷解新語』のハングル表記「卒」(ccu)のように母音が付加されていない点においては相違している。

### 3.2.2. 語中・語末の狭母音の表記

土井忠生(1982)では「語中・語末の狭母音 i が摩擦音に続いている場合は聞き取りにくかったであろう」とし、Uxqui(折敷(注；Voxiqi をしきー日本の食卓(『日葡辞書』の注記)(土井)))、Atraxca(新しか)、Fax(箸)、Fanax(ハナシ)等の例をあげている\*11。

ところが、摩擦音に続く狭母音iが必ず表記されないわけではなく、同じ語形でも狭母音iが表記される場合と表記されない場合とがある。例えば、これらの例として、以下のような例が見られる。

「Uxiqui : Uxqui」(折敷)

「çaxiqui : çaxqui」(座敷)

「Guaquiçaxi(ママ) : Baquiçax, Uaquiçax [M : Vaquizax]」(脇差)

また、土井忠生(1982)では marsuru の4例(Oreymox marsuru(御礼申しまるする)、Tabe marsuru(たべまるする)、Ytandaqui marsuru(いただきますする)、Corobmargen(転びまるせん))を取りあげ「アピラ・ヒロンが marsuru と書いた語中の r は語尾の ru と対照して、音節 ru の略記と見るよりは、u 母音が弱体化して、「まるする」から「まする」へうつる過程の一段階を示すもの」であると述べている\*12。

その他、破擦音に続く狭母音 u も聞き取りにくい場合があったようである。例えば、同じ「津」の例の中でも Cuchinotzu(口の津、p.188)、Tzucumi(津久見、p.192)のように母音 u が表記される場合と、Ximantzsama(島津様、p.128)のように母音 u が表記されない場合がある。また、Futzin [M : Futzca] (二日)の例のように写本によって母音が正しく表記されない例が見られる。このように、母音 i, u が正しく表記されないのは、摩擦音、破擦音に後続する狭い母音が無声化により聞き取りにくかったことを反映しているものであろう。

福島邦道(1975)では、「ヴァチカン写本・『天草版平家物語の書き入れ難語句解』・Collado・『日本王国記』などに散見する用例によれば、キリシタン時代に一部のことばに母音の無声化したもののあったことが事実である。しかしながら、これらの無声化現象は、ある一定の音韻条件には必ず無声化が起こり得たかどうか、疑わしいところもある。たとえば、ヴァチカン写本において、同じことばが無声化されなかったり、無声化されたりしているようなこともあるのである」とし、tasque / tasuque(助け)、musco / musuco(息子)、musme / musume(娘)などの例をあげている\*13。

一方、外国資料における母音の無声化は、小倉進平(1934)によって早くから指摘されている。「日本語にありては各音節は原則として母音に終り、子音を以て結ぶことはないと言われて居る。故に英語の dog, top は doggu, toppu の如く発音さ

れる。十七八世紀頃に出版せられた外国人側の日本語に関する記事を見ると、当時の日本語の発音には音節を子音で結ぶ現象が普通に存したらしい」とし、Mis Cosmis(「飯きこしめせ」の義か)、warrangusar(「悪うござる」の義か)、Asch(「足」の義)、jabrimesch(「破ります」の義)、semeku は semekf、toru は torr、abramussi は abramuss などのように発音される例をあげている\*<sup>14</sup>。

このように、破擦音や摩擦音に後続する狭い母音などの例は聞き取りにくい場合が少なくなかったようである。これらの例のように『日本王国記』における舌内入声音の場合も、開音節化形「Saymatzu(歳末)」を除いた多くの例に母音が表記されない-tzの形が用いられているが、それでは、どうして舌内入声音には母音が施されていないのであろうか。ここで一つ考えられるのは、舌内入声音の開音節化が進んではいるものの、入声音に付加される母音が聞き取りにくいほど弱かったため、まだ和語のツtzuのように独立した一音節ではなく、開音節化する直前の完全に母音をともなわない-tzの形が用いられていたのではないかと思う。

### 3.3. 舌内入声音-tの音価について

キリシタン資料における舌内入声音-t 表記の規範性については、早くから指摘されている。池上楨造(1953)は「人造の偶然的な、或は規範にすぎた要素をより分ける要がある」とされ、ついで、浜田敦(1955)においても「キリシタン資料が、この様なもの(舌内入声韻尾：筆者注)をすべて t で統一してゐるのは、他の場合にも往々にして見られる、この資料の一つの弱点とも云える「規範性」から説明できるであらう」としている。

また、福島邦道(1983)では、写本と版本のちがいについて「版本の表記のしかたはできるだけ規範的にしようとしており、写本の表記のしかたはきわめて自由であったとしても、ことばそのものにもちがっているものもあったという印象を拭い去ることができないのである。版本の日本語がオーソドックスなものとするれば、写本のような日本語もまた有り得たと思われる」と、指摘している。

ただ、「サントスの御作業」における版本と写本とのちがいについて、「ジヂ、ズヅの混同」「オ段長音の開合の混同」「カ クウ、ガ グウの混同」などをあげている

が、舌内入声音については版本も写本も同じく -t を規範としていることが指摘されている。

以下では、J.ロドリゲス『日本大文典』の中から、舌内入声音-tと、その表記に関わりがあると思われる記述を取りあげ、検討してみることにする。

- 「綴字」の項目の記述の中で、「ある綴字で T に終るものは、日本では  
‘つ’ (tɕu) の綴字に当るのであって、その T を ‘詰字’ (Tɕumeji) と呼ぶ。  
さうして T そのものを写す文字がないので、Guat と書くべきを  
‘ぐわつ’ (Guatɕu) と書く」(p. 231) と記されている。

- 「日本語の発音法」の項目の記述の中で、「Tɕu(ツ)と Dzu(ヅ)の音節は、この国語に於いて、Tu、Du の音節に当るものである。われわれはこれに似た発音を持ってゐないから、これを如何に発音すべきかといふ事は、実地の発音と練習とに任すの外ない」(p. 638) と記されている。

これらの記述から Tu、Du の音節がすでに破擦音化していると考えられる。また、日本語には存在する音節がポルトガル語には欠けている音節について「実地の発音と練習とに任すの外ない」とし、発音の難しさをあげている。

なお、舌内入声音の多くの例を T で表記していることは、舌内入声音が現代日本語のような「つ」(tsu)ではなかったことを示しているものではないかと思う。ローマ字表記 T をもって‘詰字’としていることは、『捷解新語』の舌内入声音の多くの例が和語の単書表記とは違う‘短くつまった感じの音’をあらわす並書表記になっていることと相通じるものである。

ここで‘詰字’とはいったい何かという問題があるが、T が日本語の「つ」(tɕu)をあらわすのに用いられる表記であることを考えると、T は日本語の「つ」(tɕu)の‘短くつまった感じの音’をあらわしているのではないかと思われる。即ち、現実音の舌内入声音は tɕu のような開音節化の段階にまで進んでいたものの、まだ舌内入声音-t にともなう母音が弱かったために、理想として‘詰字’-t の形を用

いたのであろう。なお、『音曲玉淵集』の「つめ字よりうつりやうの事」では、-t 音の後にカ・サ・タ行音が続くと「ツメテうつる」とし、また-t 音の後にガ・ザ・ダ・バ・ナ・マ行の有声子音が続くと「ツメ字を吞」としている。このように舌内入声音に「ツメテうつる」「吞」のような注記が見られるのは、少なくとも一般の口頭語においては入声音の開音節化が進んでいたことが推測できる。

以上から、キリシタン資料における舌内入声音-t は開音節化する直前の音をあらわす表記であることが考えられる。また、16世紀以降のチ・ツの破擦音化を考慮すると音韻論的には/-tsu/ととらえたものであると思われる。但し、舌内入声音-t は-t にともなった母音が弱かったために、舌内入声音が閉音節であるか、開音節であるかを聞き取ることが容易ではなかったことを反映しているもので、舌内入声音の開音節化の一段階を示すものと思われる。それを符号であらわすと寄生母音をともなった-ts<sup>h</sup>が想定できる\*<sup>15</sup>。

#### 4. 『捷解新語』のハングル表記

日本語を転写するハングル表記は日本語の仮名と同じく一文字が一音節を表わすが、一方、仮名とは違って一文字が音素と音素との組み合わせにより作られているので、一応音素に対応する要素に分析して表わすことができるという点で有意義である。特に、『捷解新語』は1世紀余りの時期にわたって改訂を重ねた日本語学習書で、キリシタン資料とほぼ同時期の言語を反映した資料として相互に補完できるなど日本語史の研究において少なからぬ影響を及ぼすものであると思う。

本節では、前述のようにキリシタン資料のローマ字表記のほとんどの舌内入声音が閉音節-t として用いられているのに対して、朝鮮資料におけるハングル表記のほとんどの舌内入声音が母音をともなう「卒」(ccu)として用いられていることを取りあげ、『捷解新語』三刊本における舌内入声音のハングル音注を中心に考察を行なうことにする。

## 4.1. 舌内入声音のハングル表記

入声音の場合、唇内入声音、喉内入声音の表記は比較的安定していて、和語と同じく単書表記が用いられているのに対して、舌内入声音の表記は安定しておらず複雑である。即ち、唇内入声音の仮名表記に当たる「つ」と、喉内入声音の仮名表記「き」「く」のほとんどの用例が単書表記「추」(cu)、「기」(ki)、「구」(ku)として用いられており、和語の「つ」「き」「く」のハングル音注が単書表記であることと一致している。一方、舌内入声音の仮名表記「ち」は和語の「ち」と同様に単書表記「치」(ci)が用いられているのに対して、舌内入声音「つ」のほとんどの例には並書表記「추」(ccu)が用いられており、和語の「つ」が単書表記「추」(cu)であることとは対照的である。

その他、舌内入声音のハングル音注には多様性が見られるが、以下の<表1>では『捷解新語』原刊本、改修本、重刊本における舌内入声音のハングル音注をまとめてみることにする。

&lt;表1&gt;

	原刊本	改修本	重刊本
卷一～卷九 語中	-치(ci)5(55)- 一夜, 吉日, 越後, 七郡, 八郡… -찌(cci)1(1)- 吉日	-치(ci)5(57)- 一夜, 吉日, 越後, 七郡, 八郡	-치(ci)3(28)- 一夜, 吉日, 越後 -찌(cci)2(16) 七郡, 八郡
卷一～卷九 語末	-치(ci)3(50) 日, 別, 一  -추(cu)3(3) 静謐, 終日, 薩摩  -추(ccu)7(20) 時節, 雑説, 一切, 雑物, 来月, 終日, 差別…	-치(ci)3(56) 日, 別, 一 -치(t ci)2(2) 第七, 第八 -즈(cu)5(6) 静謐, 差別, 進物, 昨日, 薩摩 -즈(ccu)8(19) 第一, 時節, 雑説, 一切, 雑物, 来月, 終日, 格別… -치(t cu)3(4) 食物, 節, 粗末	-치(ci)3(46) 日, 別, 一 -치(t ci)2(4) 第七, 第八 -즈(cu)2(2) 静謐, 薩摩 -즈(ccu)8(33) 第一, 時節, 雑説, 一切, 雑物, 来月, 終日, 格別, 差別… -치(t cu)1(2) その節

		-ㄷ(t)1(1) 恐悦	-ㄷ(t)1(1) 近日
卷十 語中	-지(ci)2(10)- 別条, 一段	-지(ci)2(3)- 別条, 一段 -ㄷ(zi)1(1)- 別藏	-지(ci)1(2)- 一段
卷十 語末	-지(ci)2(23) 一, 日 -ㄷ(zi)1(2) 別  -즈(ccu)4(11) 翌日, 昨日, 頃日, 傳筆, 切切, 當月  -ㄷ 주(t cu)1(1) 多筆 -ㄷ(t)5(10) 惴札, 貴札, 一筆, 啓達, 相達, 推察, 喜悅	-지(ci)2(22) 日, 一 -ㄷ(zi)1(1) 別 -즈(ccu)1(1) 翌日 -즈(ccu)2(3) 昨日, 當月 -즈(ccu)2(7) 昨日, 頃日, 切切 -ㄷ 즈(t cu)2(3) 傳筆, 多筆, その節 -ㄷ(t)5(10) 惴札, 貴札, 一筆, 啓達, 相達, 推察, 喜悅	-지(ci)3(22) 一, 日, 別   -즈(ccu)5(12) 貴札, 昨日, 頃日, 切切, 推察, 當月  -ㄷ 즈(t cu)2(2) 多筆, その節 -ㄷ(t)4(8) 惴札, 一筆, 啓達, 相達, 喜悅

( )内の数字は、延べ語数を示す。

以上のように、舌内入声音の仮名「ち」に用いられるハングル音注の場合はほとんどの例が単書「지」(ci)として用いられており、和語の「ち」に単書「지」(ci)が用いられることと一致する。それに対して、舌内入声音の仮名「つ」に用いられるハングル音注の場合は卷一～卷九では一般的に並書「즈」(ccu)が用いられ、卷十では「즈」(ccu)、「-ㄷ 주」(t cu)、「-ㄷ」(t)等のように音注において多様性が見られており、和語の「つ」に単書「주」(cu)が用いられていることとは対照的である。

一方、語中の舌内入声音は卷別による差異は見られず、後続する音が無声子音である場合は促音形「-ㄷ」(t)が用いられており、それ以外の場合はほとんどの例が

「지」(ci)として用いられる\*<sup>16</sup>。また、語末の舌内入声音は「지」(ci)の他に並書の「卒」(ccu), 「쓰」(ccu)が見られており、特に、卷十では三刊本ともに入声音形「-ㄷ」(t)が見られる\*<sup>17</sup>。

#### 4.2. 舌内入声音の開音節化

朝鮮資料におけるハングル表記においては舌内入声音が入声音形「-ㄷ」(t)、または母音をともなう開音節化形「卒」(ccu)などとして用いられることが取りあげられる。浜田敦(1955)、亀井孝(1984)などでは、ハングル表記に反映されている舌内入声音の形「-ㄷ」(t)と「卒」(ccu)の表記について、それぞれ舌内入声韻尾-tと現代語の「つ」tsuのように開音節化している音であると推定している。

しかし、これらの先行研究の問題点として、舌内入声音の開音節化形「卒」(ccu)が今日の「つ」のような音を表わしているということには疑問が残る。即ち、「-ㄷ」(t)が閉音節であるのに対して「卒」(ccu)が母音をともなう形であることから、ただちに「卒」(ccu)が今日のような「つ」の音を表わしたと考えるのは危険であると思う。なぜなら、舌内入声音に用いられる並書表記「卒」(ccu)に並行して和語の「つ」には単書表記「卒」(cu)が用いられており、舌内入声音と和語が並書表記か単書表記かによって基本的に区別されているからである。

もし舌内入声音が中古漢語のような閉音節であったとすれば、卷十に見られる「-ㄷ」(t)表記だけでも充分だったはずである。しかし、「卒」(ccu)のような並書表記が用いられることは単なる閉音節ではないことを示していることになる。ただ、上で述べた通りに和語「つ」には「卒」(cu)のような単書表記が用いられることから、舌内入声音の「卒」(ccu)表記は和語のような開音節化形とは何らかのちがいをあらわしていることが考えられる。

一方、同じハングル表記といっても、対訳に用いられるか、音注に用いられるかによって、その表記法にちがいが見られる。即ち、対訳の場合は原刊本成立時期の朝鮮語表記法と一致しており、恣意的表記が用いられているのに対して、音注の場合は当時の朝鮮語の表記法とは一致しておらず、綴り字の統一性が見られるなど外国の音を忠実に反映するための音声的表記が用いられている。例えば、並書の場合

において、対訳では合用並書(異なる子音の重ね表記)と各自並書(同じ子音の重ね表記)が用いられており、音注では各自並書のみが用いられていることが取りあげられる<sup>\*18</sup>。

토수호(ト・スヒ1995, pp. 104-156)では、ハングルにおける並書表記のうち、舌内入声音に用いられている各自並書は音韻単位ではなく、硬音の音声、即ち、音声単位として前後音の接続関係からなる発音現象を忠実に記録するための *Phonetic Sign* であると指摘している。また、小倉進平(1928, pp. 311-312)では、朝鮮語の *toin-siot* の発音について、支障部において氣息が或る程度蓄積せられ、子音を長く抑えるような発音として、日本語の *pp*、*tt*、*kk*、*ss*、*ttʃ* などの促音現象と相似た点であるとしている。

以上のように、『捷解新語』の舌内入声音の表記がほとんど「𐄢」(*ccu*)であることを、朝鮮語史における並書と関連づけて考えてみると、おおよそ舌内入声音「𐄢」(*ccu*)は音声を表す表記で、促音のようにつまった感じの音をあらわす表記だったようである<sup>\*19</sup>。しかし、「𐄢」(*ccu*)表記の子音部分の印象が強くなると、相対的に母音部分が弱くなることが想定されるが<sup>\*20</sup>、舌内入声音のハングル表記にはすべて円心母音 *u* が用いられていることには疑問が残る。

そこで、朝鮮資料におけるサ・タ行のウ列音ス・ツのハングル表記を調べてみると、『朝鮮板伊路波』及び『捷解新語』原刊本では他の行と同様に円唇母音「ㅜ」(*u*)が用いられているのに対して、『捷解新語』改修本、重刊本や『倭語類解』などでは非円唇母音「ㅡ」(*ɯ*)としてほとんど統一した表記が用いられていることがわかる<sup>\*21</sup>。

このように、サ・タ行のウ列音ス・ツが原刊本では円唇母音であったのに対して、改修本以降非円唇母音に書き改められたのは、何らかの影響なしで短期間にス・ツの発音が変化したと考えるには無理があり、転写法だけの変化であることが考えられる<sup>\*22</sup>。

それでは、舌内入声音の円唇母音から非円唇母音への変化についても和語のス・ツと同じように転写法の問題として言えるのであろうか。舌内入声音についても、期間の短さ、開音節化の方向性、ゆれのない統一した転写法などからみて、発音が

変化したため表記が変化したというより転写法のちがいによるものとして考えた方が妥当ではないかと思う。但し、上で述べてきたように、舌内入声音「𐄣」(ccu)表記は入声音形の名残から子音部分の印象が強くなった結果、相対的に母音部分の発音が弱くなり、母音が不完全にしか実現されなかったことが考えられるが、原刊本ではすべてのウ列音が円唇母音 u として統一されているのはむしろ不自然のように思われる。もちろん、開音節化していない舌内入声音を写す方法として和語と同じように円唇母音 u だけではなく非円唇母音 ʊ も充分に考えられることである。しかし、すでに原刊本において舌内入声音の音注として他のウ列音に倣って規則的に円唇母音 u が付されたことは、少なくとも、舌内入声音が中古漢語の入声音-tではなかったことがうかがえる。

## 5. 本章のまとめ

本章では、朝鮮資料のハングル表記にあらわれる舌内入声音の表記と音価について、キリシタン資料のローマ字表記と比較してその規範性の考察を行った。キリシタン資料の『日葡辞書』『日本王国記』などのローマ字表記と、『捷解新語』のハングル表記における舌内入声音の表記をまとめると、

- ①『日葡辞書』をはじめとする日本語教科書として使われるキリシタン資料における多くの版本、写本が舌内入声音-tを規範としている。
- ②それに対して、『日本王国記』のような非教科書資料では多くの例に16世紀以後のチ・ツの破擦音化を反映した-tz 表記をも用いており、規範性・統一性が見られない。
- ③一方、『捷解新語』では舌内入声音に並書表記「𐄣」(ccu)が用いられており、和語に単書表記「𐄣」(cu)が用いられることとは対照的である。

ことが分かる(<表2>参照)。

&lt;表2&gt;

	入声音形	開音節化の一段階を表す表記		開音節化形
日葡辞書	-t	(-t)		tqu
日本王国記	-t	(-t, tz)		tzu
捷解新語	-ㄷ(t)	-ㄷ주(t cu)	卒(ccu)	주(cu)

これらのキリシタン資料のローマ字表記と朝鮮資料のハングル表記①②③を考え合わせることによって、近世初期における舌内入声の現実音は破擦音化していて、入声音形ではないことが推測できる。即ち、-t, -tz, 「卒」(ccu)などの表記は音韻論的には／-tsu／と同定されているもので、開音節化する直前の完全に母音をともしなわない音として開音節化の一段階をあらわす表記であることを考えると、寄生母音をともなった「-ts」のような符号であらわすことができる。

以上、キリシタン資料、朝鮮資料における舌内入声音のローマ字表記とハングル表記を総合的に考えることによって、日本語教科書である『捷解新語』の規範意識の実態を明らかにすることができた。

## 注

- \*1 キリシタン資料における舌内入声音を論じる際、室町末期まで舌内入声韻尾 t を保っていたとしている。そこで、本論文では、キリシタン資料と同時期の資料である『捷解新語』（原刊本）の舌内入声音の表記を中心に切りあげ、両資料に開音節化が進んでいたことを論じることとする。
- \*2 安田章(1973)は、重刊本における舌内入声音の「つ」に段階性を付けて述べるとともに、和語の「즈」(cu)に対する舌内入声音の「卒」(ccu)存在を指摘し、舌内入声音を表す「卒」(ccu)と「즈」(cu)のハングル表記が通時論的に対立していることを示唆している。但し、同氏を取りあげた重刊本の成立年代から考えて18世紀の後半まで舌内入声音の一般化が行われていなかったということになり、日本語史から見て矛盾があるように思う。そこで、本論文では原刊本

に見られる舌内入声音を表す並書表記「𐄎」(ccu)と単書表記「𐄏」(cu)が通時論的に対立しているものとして考える。また、重刊本に見られる舌内入声音はほとんど改訂が行われていないことから原刊本、改修本の踏襲である可能性が考えられる。

- \*3 橋本進吉(1928)『吉利支丹教義の研究』、森田武(1993)『日葡辞書提要』など参照。
- \*4 柳田征司(1993, pp. 420-427)『室町時代語を通して見た 日本語音韻史』参照。
- \*5 森田武(1985, p. 223)参照。『日葡辞書』に用いられる「l,」は vel(または)の略であるとし、標出語の「l,」の用法として、「1 同語の異表記形並列 2 同語の清濁形並列 3 漢音と呉音形並列 4 原形と省略形・短縮形並列 5 原形と転化形並列 6 名詞・語幹と活用形並列」の用法をあげている。ただ、本論文では「3 漢音と呉音形並列」用法の舌内入声音の例だけに限る。
- \*6 林史典(1995, pp. 182-185)「第6章 古代語の音韻・音韻史」『日本語要説』参照。「16世紀以後タ行音のチ・ツの破擦音化が進んで、[ti][tu]が現在のような[tsi][tsu]に変化したらしい」とする。
- \*7 土井忠生(1982, p. 275)「アビラ・ヒロン『日本王国記』の日本語」『吉利支丹論攷』参照。
- \*8 ローマ字表記は、土井忠生(1965)「アビラ・ヒロン 日本王国記」『大航海時代叢書』X I の訳注本による。
- \*9 土井忠生(1965)前掲著の補注参照。ローマ字表記について、エスコリアール版写本によりその綴字を挿入したが、必要に応じてマドリー版写本の綴字を「M : Catana」のごとく付記した。ページは、訳注本の所在ページを示す。
- \*10 土井忠生(1982, p. 287)前掲著参照。
- \*11 土井忠生(1982, pp. 282-283)前掲著参照。
- \*12 土井忠生(1982, pp. 293-294)前掲著参照。「これら四例とも、「𐄏」が r とのみあるので、これをどう読みとるべきかということが問題となるが、他に Furta(古田、三四九ページ)、Furmay(振舞、三五二ページ)、Furcagua machi(古川町、四一七ページ)の例もあるので、一応ルと読んでよからう」。これらの

例の他に、「る」が r とのみある例として、Cataxiquenongozar(かたじけのうござる、p.346)、Corondear(転ぶ、p.473)(注；日本語の「ころぶ」をエスパニヤ語動詞として corondear の形で用いる(土井))の例が見られる。

- \*13 福島邦道(1975, pp.6-9)参照。
- \*14 小倉進平(1934)「朝鮮語と日本語」『国語科学講座』Ⅳ参照。また、福永静哉(1997, p.61)において「キリシタン資料では、すべて破裂音 / t / で表記するのみで、その発音方法などを記述した資料はない。中国の舌内入声音 / t / は、おそらくヨーロッパ言語では珍しいものではなかったのであろう」ということから、日本語を写したキリシタンたちの母語の影響も考えなければならない。
- \*15 林史典(1980, p.339)参照。
- \*16 語中の舌内入声音は無声子音が後続する場合に限って促音形「-ㄷ」(t)が用いられるが、「いつさん」(一盞 it-zan, 改修本巻二10オ, 重刊本巻二15オ)の場合は有声音が後続する例として唯一促音形「-ㄷ」(t)が用いられている。原刊本(巻二7ウ, 巻三5ウ)にも「盞」を zan として表記している例が見られており、改修本、重刊本でも原刊本のように朝鮮漢字音 can の影響により語中において有声音化された zan が残ったのであろう。即ち、「一盞」は舌内入声音「一」に後続する朝鮮漢字音「盞」can の影響をうけた結果、促音形「-ㄷ」(t)が用いられたものと思われる。
- \*17 一方、和語の促音形「もつて、もつとも、よつて」とともに、舌内入声音が語中において促音化する場合もすべての例に閉音節「-ㄷ」(t)が用いられており、中古漢語の舌内入声音-t と一致していることは決して看過することができない。
- \*18 対訳・音注の表記法については別紙で詳細に扱うこととする。ex) 合用並書：各自並書、-ㅅ(s)：-ㄷ(t)等。
- \*19 『捷解新語』原刊本における和語の促音形のハングル表記は、一般に並書表記 tt- が用いられ、舌内入声音が並書表記 cc- として用いられることと一致している。このように、並書表記が用いられているのは朝鮮語の濃音の特徴を利用して促音と舌内入声音のつまった感じを表そうとしたものと思われる。

- \*20 梅田博之・梅田規子(1965, p. 30)では、ソウル方言における濃音について「濃音の特徴としてあげられている喉頭の緊張は一貫しては認められず、むしろ子音の発音時には強く自己を主張して母音への移行をこばみ、母音への過渡的部分はすべて母音の発音時に押しつけてしまう頑固さに濃音の特徴があると解釈され、子音発音時にすでに母音への移行を準備している平音、激音と著しい対象をなしている」と述べている。
- \*21 改修本以降の文献では、一般的に「ス、ツ」の母音は、非円唇母音「一(ɯ)」として用いられているが、例外的に円唇母音「ㄷ(u)」として用いられている例がいくつか残っている(以下の下線の例)。

ㅅ구레데(すくれて, 三15ウ)、ㅅ이교(すいきよ, 十中22ウ)、  
 ㅈ가마즈리(つかまつり, 十中2オ)、ㅈ가마주리(つかまつり, 十中21ウ)、  
 모ㄷㅅ mou-su(申, 十下1ウ)、다데마주리(たてまつり, 十下9オ, 20ウ)。

七例の中で1例を除いて、6例が巻十に集中しているが、それは、舌内入声音の-ㄷ(t)とともに文語体(候文書簡文)の名残として残っているのだろうか。

- \*22 安田章(1973)では、「ス・ツの母音が円唇母音から非円唇母音に書き改められたのは、初本以降の変化によるものとは、一概に決定できず、むしろ、音韻論外的変異である、ス・ツの母音を、あるがままの姿で、忠実に表わすようになっただけでのことではあるまいか」との指摘がある。

#### 参考文献

- 池上禎造(1953)「キリシタン資料」『国語学』11
- 梅田博之・梅田規子(1965)「朝鮮語の「濃音」の物理的性質」『言語研究』48
- 小倉進平(1928)「朝鮮語の toin-siot」『岡倉先生記念論文集』 研究社
- 小倉進平(1934)「朝鮮語と日本語」『国語科学講座』Ⅳ

- 亀井 孝(1984)「捷解新語の注音法」日本語のすがたところ(一) 音韻」  
吉川弘文館
- 河野六郎(1994)「ハングルとその起源」『文字論』三省堂
- 小松英雄(1959)「舌内入声韻尾と促音との交渉」『言語と文芸』2
- 小松英雄(1971)『日本声調史論考』風間書房
- 土井忠生訳(1955)J.ロドリゲス『日本大文典』(1604・8)三省堂
- 土井忠生(1965)「アビラ・ヒロン 日本王国記」補注『大航海時代叢書』XI  
岩波書店
- 土井忠生(1982)「アビラ・ヒロン『日本王国記』の日本語」『吉利支丹論攷』  
三省堂
- 沼本克明(1982)『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
- 橋本進吉(1928)『文禄元年天草版 吉利支丹教義の研究』『キリシタン教義の研究』  
岩波書店(1961)所収
- 浜田 敦(1955)「語末の促音」『国語・国文』24・1
- 林 史典(1974)「呉音のかな表記における舌内および喉内入声音のかきわけについて」『千葉大学教育学部研究紀要』23
- 林 史典(1980)「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」『国語学』  
122
- 林 史典(1982)「日本の漢字音」中田祝夫著『日本の漢字 日本語の世界4』  
中央公論社
- 林 史典(1995)「第6章 古代語の音韻・音韻史」工藤浩・小林賢次他『日本語要  
説』ひつじ書房
- 福島邦道(1975)「ヴァチカン写本 Reg. Lat. 459の日本語表記」『実践女子大学文学  
部紀要』17集
- 福島邦道(1979)『サントスの御作業』翻字・研究篇 勉誠社
- 福島邦道(1983)「音韻史との関わり」『続キリシタン資料と国語研究』笠間書院
- 福永静哉(1997)『浄土真宗伝承唱読音概説』永田文昌堂
- 森田 武(1955)「捷解新語の成立時期について」『国語国文』24・3

森田 武(1957)「捷解新語」『捷解新語解題篇』

京都大学文学部国語学国文学研究室1973所収

森田 武(1980)『邦訳日葡辞書』補説 岩波書店

森田 武(1985)「日葡辞書の解説と利用」『室町時代語論攷』三省堂

森田 武(1993)『日葡辞書提要』清文堂

安田 章(1973)「重刊改修捷解新語解題」『三本対照捷解新語 釈文・索引・解題』

京都大学国語国文学研究室編

柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た 日本語音韻史』武蔵野書院

도 수희(ト・スヒ1995)『韓国語音韻史研究』塔出版社 ソウル

#### 辞書・出典類

『パリ本 日葡辞書』(1976)勉誠社

土井忠生他編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店